明治村だより

1999 Summer

夏号
Vol.15

名鉄沿線ご案内

目次

宇治山田郵便局重要文化財指定記念郵政建築の流れと宇治山田郵便局　飯田喜四郎……2
聖ヨハネ教会堂修理工事完成に寄せて　キリスト教会と聖ヨハネ教会堂　飯田喜四郎……7
聖ヨハネ教会堂修理工事報告　長谷川良夫……8
明治村の仕事 3 京都市電……12
館蔵資料紹介〈五〉バイオリンについて　大滝恵……13
夏の明治村……14

表紙写真 宇治山田郵便局正面

『明治村だより』第十七号発行のお知らせ

発行時期　平成十一年九月（予定）

申込方法　「明治村だより」第十七号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料一四〇円分の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

平成十一年七月十五日発行
「明治村だより」第十六号（平成十一年夏）
発行　博物館明治村
愛知県犬山市内山一番地
電話（〇五六八）六七―〇三二四　〒四八四―〇〇〇〇
ホームページ◎http://www.meitetsu.co.jp/meiji-vil/
製作　大日本印刷株式会社

宇治山田郵便局重要文化財指定記念

郵政建築の流れと宇治山田郵便局

飯田 喜四郎（当館　館長）

はじめに

やや過剰で持て余し気味の情報だが、私たちはこの情報の最も有力な送受信手段の一つである郵便を欠くことはできない。郵便局は全国至る所にあり、その数は約二五〇〇〇に及び、投函された手紙は低額の料金で短時間のうちに、国内だけではなく、海外の目的地にも送達される。この便利な郵便は前島密（ひそか）により着想され、西欧で生まれてイギリスで完成された制度を模範にして作られたもので、明治四（一八七一）年に東京―京都―大阪間で創業された。郵便はその路線を急速に拡大し、五年七月にはほぼ全国に行き渡り、六年四月から郵便料金も先進国並みに全国均一になった。

郵便物の運送と配達は各宿場に設けられた郵便取扱所で、駅詰めの府県官吏の監督の下で行われたが、四年十二月にこの制度が廃止されたため、駅通寮（郵政省の前身）は取扱所を新設し、そこに専任の官吏を配置しなければならなかった。しかし当時の郵便事業はその負担に耐えられない。そこで地方の名望家を選んで郵便取扱人に任命して準官吏とし、その自宅の一部に取扱所を設けて業務を一定額で請負わせる方法がとられた。取扱人は準官吏として社会的地位は高いが、小額の手当を支給されるだけなので、商業などの職業を兼ねることができた。

明治四年に一七九ケ所であった郵便役所（中央郵便局）・取扱所（郵便局）は、五年には一一五九ケ所、七年には三二四四ケ所に急増した。郵便取扱所は七年に郵便役所、八年に郵便局と改称されたが、郵便取扱人は名称も職掌も変わらず、民間の人材と資金を利用するこの巧妙な方法により郵便事業を続けた。

郵便局舎

明治初年、政府の諸機関は旧幕府や旧諸藩の建物を利用したが、東京の郵便役所も日本橋四日市町にあった廃屋に開設された。郵便事業を総括する駅通司（後の郵政局）が日本橋材木町の新築庁舎に入ったのは明治七年であった。この庁舎は明治村にある旧三重県庁舎（明治十二年）のように、木造だが木の骨組を漆喰（しっくい）塗りで隠した石造風の外観の建物で、擬洋（ぎよう）風とよばれる。現存しないが、横浜（明治六年）、長崎（八年）、名古屋（十年）、新潟（十四年）など主要な郵便局舎も擬洋風であった。

内閣制度が発足したころ、数は少ないが正規の専門教育を受けた邦人建築家が活躍し始めた。逓信省（昭和二四年に郵政省と電気通信省に分割された）の最初の建築技師になった佐立七次郎（明治十二年工部大学卒）は、明治二十～二四年に煉瓦造二階建・ルネッサンス様式の郵便電信局を大阪、名古屋、横浜に造ったが、いずれも現存しない。

札幌郵便局に合併された札幌電話交換局（明治三一年。昭和三九年明治村へ移築）は、軒蛇腹に小型の円花をまばらに、胴蛇腹に大型の円花を連続して刻んだ華やかで伸び伸びした初期ルネッサンス調の石造建築で、逓信技師野口孫平（二七年東大卒）の設計といわれる。

下関には明治四年十二月に郵便取扱所が開設され、六年には電信局も設置され、三三年に煉瓦造二階建の局舎（現在の下関南部町（なべ）郵便局）が建設された。（写真1）二階を電信用とするこの局舎は、煉瓦造の壁体をモルタルで塗り上げ、目地を切って石造のようにみせる。正面入口のある表通り側では局舎の中央部分をやや突出させ、軒上に勾欄を従えた切妻壁状の装飾を立ち上げていた。入口とその両側の窓を挟んで片蓋柱を立て、入口の上にはエンタブレチュア（ギリシア建築において円柱の上から軒先までを構成する部材）をへだてて、浅い円弧を数層重ねたペディメント（ゆるい傾斜の切妻壁）を置く。装飾を抑制した端正で美しいこの局舎を設計したのは、逓信技師三橋四郎（明治二六年東大卒）である。

東京、大阪とならんで明治四年に開設された郵便役所の後身である京都郵便局（写真2）は、十九年に一等局となり、京都府と滋賀県の郵便・電信業務を監督した。三五年に再建された煉瓦造二階建の局舎は、京都の洗練された町並みを意識したためと思われるが、やや石材を多用し過ぎたきらいのあるルネッサンス様式で、吉井茂則（十六年東大卒）の指導の下で三橋四郎が設計したものである。

十九世紀の欧米では過去の様式を洗練させたり、複数の様式を組み合わせて建築を設計したが、世紀末には伝統的様式にとらわれない新しい建築をつくる運動が起こった。この運動は科学と科学的技術は人々を無限の発展へ導くとの

写真2　中京郵便局
（旧　京都郵便電信局）

楽観的期待の上に立って、合理主義を万能の指針とする建築観を生み出した。

多くの気鋭の建築家を擁した通信省は、華やかで変化に富む屋根をかけた吉田鉄郎（大正八年東大卒）設計の山田郵便局電話分室（大正十二年、現在はレストラン）やダイナミックで幻想的な抛物線形トンネルヴォールトを並列した屋根を頂く山田守（大正九年東大卒）設計の東京中央電信局（現存せず）のように、豊かで個性的な美しい建築を生み出した。この表現主義的傾向に続いて、東京中央郵便局（昭和六年、吉田鉄郎）や東京逓信病院（昭和十二年、山田守、現存せず）など、清楚だが暖かさに欠ける近代主義の典型的作品によってわが国の建築界をリードした。

山田郵便局

宇治山田では明治五年に黒田仁兵衛を取扱人とし、その自宅の一部四坪を事務室とする郵便役所（取扱所？）が設けられた。八年には山田郵便局と改称され、二等に格付けされた。当時、一等は全国で七局、二等は六五局、三等以下は三四六〇局であるから、二等はかなり重要な郵便局だが、その規模も形状も分からない。

山田郵便局は局長の交替や郵便業務の増大に伴って、明治四二年までに局舎を五回も移転したが、平面が分かるのは二四年に二代目取扱人の世古口局長が、自費で山田電信局舎（十三年に国費で新築された）を増改築した郵便電信局舎（図1）だけにすぎない。

郵便量の増加と電話業務の取扱い開始、ならびに四二年遷宮を目標とした神苑会＊注1の整備事業に呼応して、宇治山田では逓信技手白石圓次の設計により外宮表参道に面して国費による本格的な局舎が四二年五月に初めて完成した（図2）。その後、夜間電話業務の開始と電信電話・郵便業務の増加に伴い、逓信技師吉田鉄郎の設計で隣接地に電話分室が増築された（図3、写真3）。昭和六年山田郵便電信局は一等局になったが、十六年の等級廃止により一～二等四一二局は普通局、三等一二八二四局は特定局と改称された。

昭和四八年の遷宮を控えて伊勢市（三十年に宇治山田市を改称）は外宮前広場の拡張を計画したが、伊勢（旧山田）郵便局は大部分が計画地に含まれたため、局舎は四四年四月に明治村へ移築された。

図1　明治24年　山田郵便電信局

図2　明治42年創建当初の配置図・平面図

局舎の建築

局舎は内宮と外宮とを結ぶ御幸道路と豊川町通りがやや鋭角に交わる角地にあり、角地の先端に円形の公衆室へ通じる玄関を開く。直径約七メートルの公衆室はその外周の三分の一を玄関とその両側にある応接室と電話室・電報配達人控室、残りの三分の二を郵便窓口が取り囲む。公衆室は周囲の部屋よりも高く立ち上がり、採光窓付円筒形小壁の上にのる緩やかな傾斜の円錐屋根に終わる。（写真4）

停車場通り側の翼屋には公衆室に面して現業室が拡がり、郵便発着口をへだてて現業室の反対側に、集配人区分室と集配人・逓送人の控室・宿直室を一列に配置する。御幸道路側は比較的狭い電信機械室に続いて、中廊下の両側にそれぞれ電話交換室・交換手控室・建築官室と切手倉庫・修繕室・工夫溜（たまり）・局員宿直室を設ける。これらの翼屋はいずれも平屋建てで方形屋根を頂く。翼屋と公衆室との道路側の接点には、渦巻状バットレスをもつ円筒（ドラム）壁上にドームをのせた方形の小塔を造る。この小塔以外は天然スレート葺であった。

外壁は縦板張りの腰羽目の上を漆喰塗りとし、軒下の小壁に再び縦板を張るが、方塔は下見板を張る。方塔には上下四段、そのほかの外壁には三段の細長い回転窓を開け、窓上は半円アーチ型小壁とするが、玄関廻りでは窓間の小壁に細い唐草文様のレリーフを刻み、（写真5）木部にも和洋をとりまぜた装飾を控え目にほどこす。（写真6）道路側では間仕切壁とは無関係に縦長窓の単窓と連窓を交互に配置する。道路側でない外壁は軒下の小壁を縦板張りとするほかはすべて下見板張りで、窓の配置にも道路側のような配慮はみられない。

石や煉瓦を主材料とする組積造やそれを模倣した建築であれば、モデルとした様式やモティーフは識別し易い。ここでもドームを頂く小塔や窓上の半円アーチ型装飾は、明らかにルネッサンスだが、イタリアには山田郵便局のような

写真3　現在の伊勢外宮前郵便局と
旧電話分室

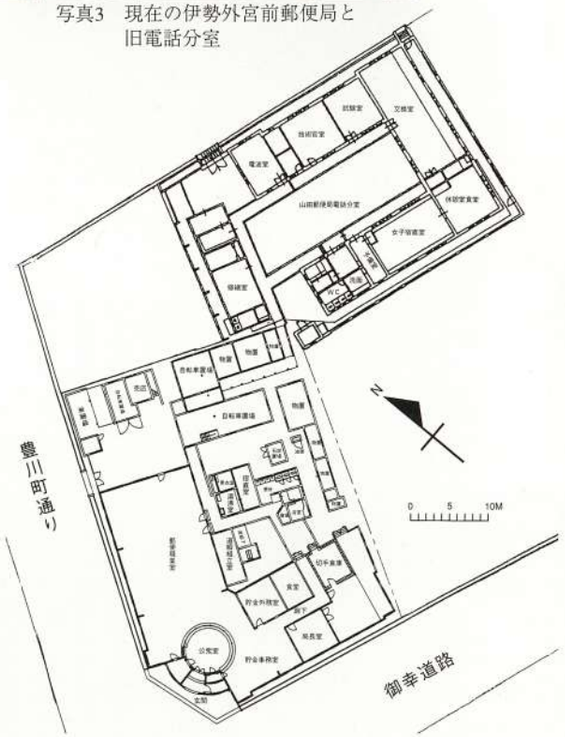

図3　昭和43年解体当時の配置図・平面図

写真4　円錐屋根内部

木造建築はない。アルプス以北の近世の西欧都市でも建築用木材の欠乏と価格の高騰、さらに防火上の規制により、木造よりも組積造を尊重する風潮が定着した。そこでは十八～十九世紀の社会的経済的変化に応じて新しい種類の建築が求められたとき、木造建築にはもはや出番は廻って来なかった。

しかし、山田郵便局では西欧の建築界で主流の座を失い、一部の住宅や農家に生き続けてきたハーフ・ティンバーや木骨下見板張りをとりあげてデザインの基調とし、それにドームのような若干のモティーフをとりこんで、新しい種類の建築需要にこたえたのである。かつてドームは神聖さを象徴するモティーフであったが、ここでは近代性と風格を与えるモティーフとして用いられており、郵便局と前後して完成された神宮徴古館（明治十二年工部大学卒、片山東熊設計）も中央にドームをあげていた。

外宮表参道に正対する特殊な位置にありながら、山田郵便局は当時再び抬頭し始めた日本建築の伝統的意匠への志向も、ほぼマスターした西欧建築の古典的意匠への心酔もなく、わが国の木造西洋館に広く普及した構法を用いて、端正で美しい風格のあるデザインにまとめられた。もしこの局舎が組積造で計画されていたら、現在のような姿にはならなかったであろう。

写真5　唐草文様レリーフ

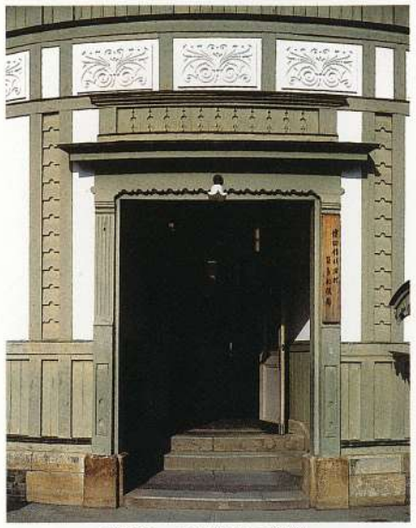

写真6　玄関廻りの装飾

＊注1　神苑会
伊勢神宮内宮・外宮の防火と荘厳化のための神域の拡大と整備、両宮の中間にある倉田山における神苑の造成と神宮の歴史博物館（徴古館と農業館と図書館）の建設を目標として明治十九年に創立した団体。当初は宇治山田（現在の伊勢市）を中心とする地域の有志により組織されたが、明治二一年に有栖川宮を総裁に戴く全国組織となり、本部を東京へ移した。明治四四年解散。（「神苑会史料」明治四五年）

参考文献
○郵政省編「郵政百年史」（昭和46年）
○郵政省編「郵政百年史資料」27郵政建築史資料集（昭和46年）
○山口修「前島密」（平成2年）
○博物館明治村「明治村建造物移築工事報告書 第10集 宇治山田郵便局（旧伊勢郵便局）」（平成9年）
○藤森照信「日本の近代建築」（平成5年）
○郵政大臣官房建築部「建築記録／中京郵便局」（昭和54年）

重要文化財

聖ヨハネ教会堂修理工事完成に寄せて

キリスト教会と聖ヨハネ教会堂

飯田 喜四郎（当館　館長）

開国（一八五四年）に伴ってキリスト教は再びわが国に導入されるが、その禁教の高札が撤廃されたのは明治六（一八七三）年であった。当時の教会はカトリック、ギリシア正教、プロテスタントの三教会で、教会堂は教会別に異なる様式で造られた。十九世紀中期の西欧では、建物はその用途にふさわしい様式で造るものと考えられていたのである

教会堂についていえば、中世は最も信仰の厚い時代で、ゴシック建築はそのあかしであるから、カトリックの教会堂にはこの様式が最良とされた。明治村にある教会堂の内、京都から移築された聖ザビエル天主堂はその例で、建築に明るい神父の指導の下に造られたので、堂内はかなり正確なゴシック様式である。しかし日本人の棟梁が見様見真似で造った素朴な大明寺聖パウロ教会堂では、開いた洋傘のような骨組みをもつ曲面天井と細い円柱を束ねたような柱や頂点の尖ったアーチのほかには、ゴシック様式に通じるものはほとんど見られない。

ギリシア正教会は地中海沿岸の東半分と黒海の西岸・南岸を領有し、現在のイスタンブールを首都としたローマ（ビザンティン）帝国の教会で、トルコに滅ぼされたのち拠点をロシアに移した。開国に伴って箱館を起点としてわが国に伝道され、東北地方から関西にまで布教された。その教会堂はドーム（四角錐や八角錐のこともある）を頂く広間と、この広間に面するが信徒には閉ざされた内陣、および広間をへだてて内陣の反対側に設けられる鐘塔と玄関で構成される（東京・ハリストス大聖堂、豊橋・マトフェイ聖堂、京都・ハリストス聖堂など）。

十六世紀にカトリック教会から離反したプロテスタント教会にとって教会堂は、信徒が福音を聞き、宗教的自覚と相互の連帯感を強化するための集会所であった。そこで教会堂は牧師と信徒、信徒相互の距離をできるだけ小さくするため、聖餐用卓子を囲んで放射状に信徒席を配置した。十八世紀には啓蒙主義に影響されて自覚がゆるみ、信徒席はカトリックの教会堂と同じ配列になり、一九世紀には宗教儀式も一部復活して再び内陣が出現した。しかし儀式は質素で内陣の規模は小さくてよいので、教会堂には一般に簡素なロマネスク様式が用いられた。

イギリスの教会も十六世紀にローマ教皇の支配を脱し、国王を首長とする英国教会になったが、大陸のプロテスタント教会とは違って建築的伝統は維持され、さらに十九世紀初には一部の宗教儀式がいち早く復興された。明治村の聖ヨハネは英国教会系の聖公会に所属する教会堂で、二基の八角塔の間に玄関と大窓を設けて正面とする。その背後に続く主屋は、バットレス（控壁）で強化した比較的低い外壁の上に、急勾配の大きな両流れ屋根を架ける。この外観は内部に一つの広大な空間を予想させるが、堂内は上下二階に分けられ、一階は日曜学校、二階はごく狭い側廊のある三廊式教会堂である。二階といってもそれは屋根裏にあたるが、そこは屋根裏という言葉が連想させるような味気ない空間ではない。中世のイギリスでは、大陸には例のないほど美しい小屋組が発達したが、聖ヨハネの堂内はこの伝統を二十世紀に再生させたといえるほど洗練された美しい空間である。この教会堂を設計したJ．ガーディナーの両親はスコットランド出身のアメリカ人である。

聖ヨハネ教会堂2階内部

聖ヨハネ教会堂保存修理工事について

長谷川 良夫（当館　建築技師）

一、はじめに

聖ヨハネ教会堂は京都市河原町五条に明治四十年に建てられた教会です。設計者はアメリカ人牧師J．M．ガーディナーで、同氏はハーバード大学で学んだ建築家でもあります。施工は日本人大工の手になります。重厚な感じの壁面に見られるロマネスクを基調として大きな四連バートレーサリー、外壁のバットレス等にゴシックの手法を加味した建物です。正面玄関の両側に塔を配して、一階は煉瓦造、二階は木造で漆喰塗り壁面に柱型を出すハーフチンバースタイルとしています。一階は幼稚園として使用し、二階は三廊式の礼拝堂としていました。建築後五十七年経過し、建物の老朽化などの理由により取り壊されることになり、昭和三九年に明治村に解体移築され、その際に二階トレーサリー（窓）等の改変されていた箇所は復原されました。

明治村に移築後三五年経過して、その間に屋根、木部、塗装などの小修理が行われてきましたが、近年に至り、豪雪による樋の破損、ペンキの剥落、壁面など各部に痛みが認められ、国庫等の補助事業として、平成十年十一月から十一年七月末までの九ヶ月、総経費約六千四百万円の計画で保存修理工事が始められました。

二、復原の経緯

昭和五六年に、明治村での保存修理工事の際に調査が行われて、正面外観の建築当初の写真（写真1）と、昭和九年の第二室戸台風の際に破損した時の二階の正面（写真2）と、側面のトレーサリーの写真が、発見されていました。明治村に移築するため解体した時に、礎石の中から発見された建築当初の図面により、改造されていたトレーサリー等が復原されていました（写真3）が、二階正面と両側面のトレーサリーのステンドグラスの形式が、かなり異なることが分かっていました。この時に移築工事報告書が刊行され、詳細が記載されています。

今回の工事を機に、トレーサリーのステンドグラスを復原することになりました。また文化庁からの指導もあって、明治村移築時に台風による破損を考慮して、木製からスチール製に変えられていたトレーサリーの窓枠を、正確に復原するため木製に戻すことになりました。

昭和九年の台風で破損した時の写真は、日本聖公会京都教区に保管されていたもので、キャビネ大の白黒写真です。当初の外観写真は、『建築世界』（第三巻十一号 明治二十二年）に載っており、同誌には簡単な仕様書も掲載されていました。窓枠そのものは昭和九年の台風による破損の際の復旧に際して、トレーサリーの形式は四連であったものを、三連に変えられ、且

写真1　建築当初の外観
（『建築世界』第3巻第11号口絵より）

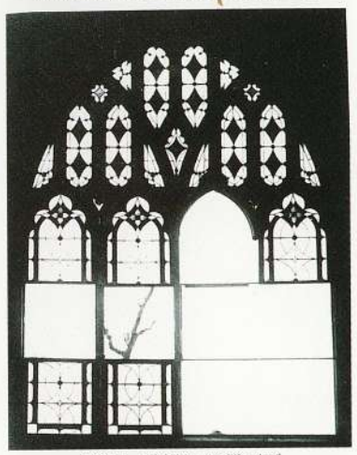

写真2　破損した2階正面

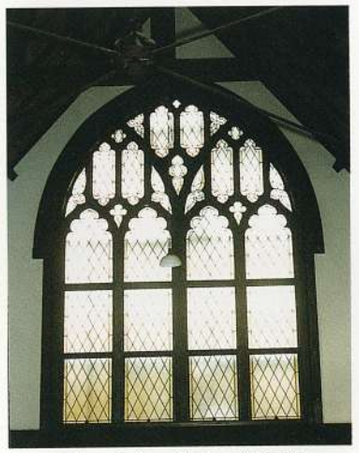

写真3　トレーサリー（修理前）

つ明治村に移築の際に、スチールにされるなどして全て失われていましたが、幸いにも外枠はほぼ完全な形で残されていて、窓の両側の柱も残っていることから、全体の大きさは変えていないことが分かりました。幅は三・五メートル、高さは五・〇メートルであることが分かります。この二枚の写真と仕様書により復原図を作成しました。小さな写真から復原図を作成するので、飯田館長を始め明治村スタッフの協力と、文化庁の指導のもとに、図面の修正を十回程重ね、三か月を要して復原図を作成しました（図1）。また、建築当初の正面の写真から、正面側の南北二箇所の階段室に所在するステンドグラスは、建築当初のもので、礼拝堂内のドーマウインドーに使用されていたことが分かります。昭和九年の台風で破損し復旧した際に、礼拝堂内は大窓共に菱形の簡略なステンドグラスに統一し、破損しなかった二箇所分のステンドグラスを、摺りガラスの一枚ものの階段室のドーマウインドーに、転用したものであることが分かりました。配色についてはこの当初のステンドグラスを参考にして決定しました（写真4）。

三、工事のあらまし

窓枠、建具を始め曲線が多く使われていて、これを木材で作ることはなかなか難しく、熟練

写真4　ドーマウインドーのステンドグラス修理後

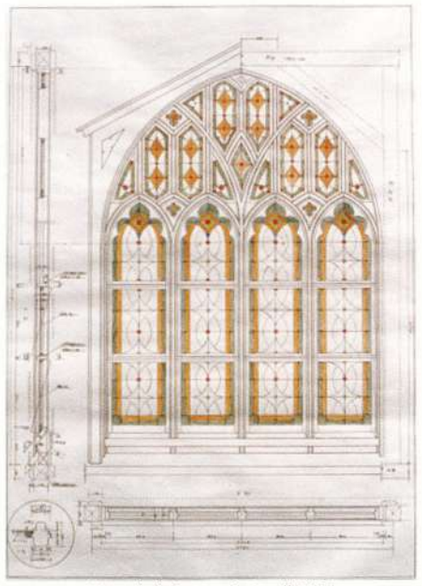

図1　大窓トレーサリー復元図

した技能者の手になることが必要です。窓枠は特に飛騨神岡町の木工所で製作しました。（写真5）木材は杉材で大きな円弧であるため、幅三十センチ厚さ十五センチ以上の赤味の材が必要ですが、これだけ大きな材でしかも含水率十五％以下の乾燥材は、現在の我が国では短期間での入手は困難なので、集成材のように細く短い材を用い、接着剤でつなぎ合わせることにしました。今回の工事中に分かったことですが、京都で建てられた当時から、窓枠の柱は幅七センチ厚さ六センチ程度の杉材を重ねて釘打ちして用い、ドーマウインドーの窓枠などは一見すると、大きな木材に見えますが、幅は三十センチ内外の板で、厚さは六センチ程度、長さは九十センチ程度と短いものを用いて、重ねて釘打ちしていることが分かりました。これは、予算節減のため高価な大きな材を用いず、且つ大きな材から円弧状に切り取ると繊維が切れるので割れやすく、強度的に弱くなるのを避けた為と考えられます。図らずも今回のこの工法は明治の先達に倣った工法となりました。但し、接合には出来るだけ在来工法を用いることにしました。ステンドグラスは在来通り、細身の鉛枠と色ガラスを用いました。摺りガラスは国産ですが、色ガラス・鉛枠等はポーランドとアメリカ・カナダからの輸入品です。

このほか左官工事では、移築時に壁はセメントモルタル塗りとしていましたが、今回は外部の壁の塗り替えに際して、建築当初の漆喰塗りに戻しました。石灰は高知県産の土佐塩焼灰を用いました。ペンキ塗りも、材料は乾きは遅いが、合成樹脂の入っていない在来のボイル油を用いたペイントを使うなど、全て伝統的な在来工法に、こだわりをもって工事を行っております。五月末現在で最大の難関である木製の窓枠の取り付けを完了しました。（写真6）通常の工事では、窓枠が出来てから建具の製作に掛かり、建具が出来てからステンドグラスの製作に掛かるのですが、それでは月日が掛かりすぎるので、今回は少し無理をして窓枠の原寸図により、建具、ステンドグラスの製作を同時にスタートしました。建具・ステンドグラスも五十％程製作を終え、板金工事は十字架包み銅板の修理を終え、左官壁も中塗りまで完了するなど、工事は順調に進捗しております。

八月にはご来村の皆様に、我が国の現代の名工達の手により見事に復原された姿を、見ていただけるよう鋭意工事を進めております。

今回の復原については、昭和五十六年当時明治村学芸員として調査を担当した松波秀子氏（現清水建設技術研究所主任研究員）に資料の提供など多大な協力をいただいたことを感謝致します。

写真5　木工所で製作中の窓枠

写真6　窓枠の取り付け完了

明治村の仕事 3

今回は、京都市電の職場を紹介します。

京都市電は、日本ではじめての市内電車として明治二十八年に京都で開業しました。当館では昭和四十二年、村内Ⅲ号地を中心に約八百メートルの軌道を敷設して動態展示をしています。歩兵六聯隊兵舎前と品川燈台前の間を約二十分かけて往復するもので、一日に二十一回運行しています。車両は、京都北野線堀川通を走っていた明治四十四年製造のものを使用しています。

この職場には現在五名が配属されていますが、その一人勤続六年になる渡辺保さんにお話を聞きました。

―この職場の仕事内容を説明してください。

この職場では、電車を運転する仕事と、後方の車掌台に立って車内を案内する車掌の業務とがあります。

朝はまず村内の変電所へ行き、送電する為のスイッチを入れることから始めます。その作業をしてから運転士と車掌は協力して出庫点検を行います。

点検というのは、運転士は主に集電装置・床下・運転台の点検、起動制御試験など車両について異常がないかどうかを調べます。一方、車掌は車掌台の点検、車内の清掃などを行うものです。この準備が終わったら試運転を開始し、通常十時からの営業運転に備えます。

―運行にあたって注意していることは

お客様に安全かつ快適に利用していただくために事故のないよう運転することが一番だと思います。また車内で案内する時は失礼のない態度で言葉遣いなどに充分気をつけるようにしています。

―かつて市電職場には名物車掌という人がいました。車内で説明するセリフを代々受け継いでいるようですが、どういったものですか。

最初の頃は何も説明などしていなかったそうですが、何か案内をした方が良いのではということで考えられたらしいです。私も教えてもらい自分なりに工夫して話していますし、時にはお客様の層に合わせてユーモアを交えた案内をしています。

(それでは前方の運転台をご覧ください。大きな窓がありますが、ガラスがありません。雨や雪が降りますと濡れてしまいます。明治時代は蓑傘をつけていました。走れば走るほどよく濡れる可哀相な運転士さんでした。電車の前と後ろに大きな網が張ってあります。前の網は人が轢かれそうになったら救い上げる救助網といいます。網の前はどうしたかという運転士の横に十二、三才の少年を乗せました。昼は赤い旗を持ち夜は赤い提灯を持って走る電車の前を走りました。それを電車の先走りといいました。京都の人は子供が言うことを聞かないと先走りに遣ってしまうぞといって叱ったそうです。)

―乗車されるお客さんの反応は如何ですか。

春や秋は学校の遠足で来る子供たちが多いですね。年配の方もトロリー・ポールの転換作業や「チンチン」という音の響きに懐かしさを覚えるようです。時にはトロリー・ポールの転換作業を体験してもらうと大変喜んでいただけます。

―身近にお客さんに接する立場としてどういうところを工夫すべきと考えていますか。

お客様に明るく笑顔で接するのは勿論のことですが、要望や意見もよく聞くようにしています。それと市電の説明ばかりでなく車窓から見える沿線の建物や、村内での催事なども積極的にPRしなければと思っています。八月にはナイター営業も実施しています。また外国人のお客様のために外国語の勉強も必要だと思います。常にお客様に喜んでいただけるよう時代を先取りしたものを積極的に取り入れながら京都市電そのものの良さを失わないよう努力しています。

―どうもありがとうございました。

一昔前は日本のどこの町にも走っていた市内電車ですが、現在は数えるほどしか見られなくなりました。昨今の交通事情にはそぐわないのかもしれませんが、車やバスと違いいかにものんびりした気分を味わえると思います。これからも明治時代の雰囲気をそのままに遺しながら楽しく夢のある乗物として保存していきたいと考えています。

館蔵資料紹介【五】バイオリン

図1　鈴木製バイオリン

鈴木バイオリン

当館所蔵のこのバイオリン(図1)は明治四十三年(一九一〇)に名古屋の鈴木バイオリン製造所で作られたもので、同じ年に名古屋で開催された第十回関西府県聯合共進会に展示されたものといわれています。この時鈴木バイオリンは、小間物や装身具、楽器などを扱う工産第四区という部門に、審査用として五点の自社製品を出品しており、そのうちバイオリンは東宮職御用品の栄誉を賜り、ビオラは一等、チェロは二等、マンドリンは三等を受賞しています。

鈴木バイオリン製造所は、当時"日本製ヴァイオリンと云へば殆ど鈴木製作のそれを云ふ"(「音楽界」第三巻第一号 明治四十三年一月)といわれるほどの一大メーカーで、国内外の博覧会ではたびたび受賞していました。創業者鈴木政吉はバイオリン作りに一生を捧げた人物で、彼が自らの半生を振り返った文章(注1)を読むと、外国に負けてはならじ、身を立て世に出、成功を、と自らを鼓舞し突き進んでいった気概が痛いほど感じられます。その明治人らしい気概が、政吉の作ったバイオリン一つ一つに体現されているようにも思えます。政吉は、それまで手作業だったバイオリン作りのために工作機械を自ら考案するなどの研究を重ねることで、上質なバイオリンの大量生産を可能にしました。その結果価格も押さえられ、明治時代のバイオリンの流行が生み出されたのです。

女学生に大流行

明治村の「森鷗外・夏目漱石住宅」を舞台にして書かれた『吾輩は猫である』(明治三十八～三十九年)には、何でも手を出したがる苦沙弥先生がバイオリンをブーブー鳴らしたりすることや、寒月君が五円二十銭のバイオリンを買ったことが出てきます。バイオリンは、日露戦争後にはその流行が新聞や音楽雑誌などの記事に取り上げられるようになりました。特に女学生の間で流行り、その様子を当時の記事から拾ってみると、その人気ぶりがうかがわれます。と同時に、バイオリン学習の難しさから外見ばかりの流行に陥っていることを嘆く論調が多いのも目をひきます。

「近時流行せる音楽の内にても殊にヴァイオリンは携帯に便なると其持歩く風が一寸ハイカラに見ゆるより女学生の如きは皆ヴァイオリンのみの志望者多く…(中略)…ヴァイオリンは最も難しきものにも拘らず唱歌さへも碌々に出来ぬ女学生が此れを學ばんとするは眞に教師泣かせと云ふべき…」(東京日日新聞 明治三十八年九月六日)

いずれにしても女学生がバイオリンを持つことがハイカラの象徴だったことは確かで、当時の雑誌の表紙や挿絵、引札などには"バイオリンを持った女学生"の構図がよく見られます。(図2)

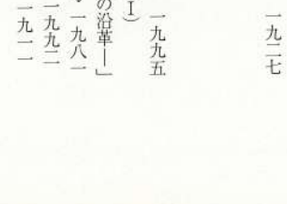

図2「あさ露」文藝倶楽部9巻13号口絵版画 鏑木清方筆　1903

箏との合奏

このバイオリンといっしょに十数冊の楽譜も寄贈されており、そのほとんどが箏曲をバイオリン用の楽譜にしたものです(図3)。このようなバイオリン用の楽譜は需要が高かったようで、明治三十年代末頃からいくつもの楽譜が出版されました。今から考えるとバイオリンで邦楽を弾くなどとても考えられませんが、当時は西洋の曲が未だあまり浸透しておらず、なじみのある邦楽が好んで演奏されていたようです。ハードとしての楽器は受け入れられてもソフトの曲まではすぐには受け入れられなかったのでしょう。また、当時の音楽会のプログラムを見ると、邦楽をバイオリンで弾くだけではなく、箏や三弦などの日本の楽器とバイオリンとの合奏も見受けられます。こうした和洋折衷のスタイルは、学校で音楽教育を受けた人が増える大正時代になると、徐々に姿を消していきました。

バイオリンで「千鳥の曲」や「越後獅子」を弾く袴姿の女学生…しなやかに西洋を取り入れていった明治時代の音楽事情の一コマといえるでしょう。

図3　ヴァイオリン音譜「みだれ」
前川書店 1907

(注1)　鈴木政吉「波瀾多かりし私の過去」
『名古屋商工会議所月報』第二四二号　一九二七

主な参考文献

日本近代洋楽史研究会『明治期日本人と音楽』
国立音楽大学付属図書館／大空社　一九九五
大野木吉兵衛「楽器産業における世襲経営の一原型(I)
―鈴木バイオリン製造株式会社の沿革―」
浜松短期大学研究論集第二十四号　一九八一
「関西洋楽事始」展示図録 大阪音楽大学音楽研究所　一九九二
愛知県『第十回関西府県聯合共進会愛知県出品報告』一九一一

大滝 恵(当館 学芸員)

夏をたのしむ。

七月十七日(土)
～八月三十一日(火)

●風鈴ロード・風車ロード
SL東京駅～帝国ホテル
伝統的な飾りによる音の涼しさに耳を傾けて下さい。

●水の舗道
レンガ通り、ハワイ移民集会所付近
舗道からの噴水で足取りも涼しく散策して下さい。

●特別展 露伴の居る風景
幸田露伴住宅「蝸牛庵」
〈内部特別公開〉
7月17日(土)～8月15日(日)
7月30日の露伴忌にちなみ、初版本や遺愛品を展示します。

●つるくさプラザ
正門、北入口、京都中井酒造ほか
ひょうたん、へちま、朝顔などが、夏を涼しげに彩ります。

●水の広場
帝国ホテル前、天童眼鏡橋
噴水、ウォーターカーテンが涼しい水しぶきを演出します。

●特別展 帆船模型展
三重県庁舎
世界と日本の帆船の歴史を約30点の模型により紹介します。

●絵手紙コンクール作品展
東山梨郡役所
7月23日(ふみの日・金)～8月31日(火)

●三村信三郎 源氏香版画展
東山梨郡役所
棟方志功の弟子である三村氏の力作を展示します。

宵の明治村
8月7日(土)～15日(日)
夜9時まで開館

●建物ライトアップ●イルミネーション●盆踊り●ガーデンコンサート●浴衣着こなしコンテスト●西洋屋台・屋台横丁●納涼映画祭●宵の小咄●占い師大集合●二重橋飾電燈点灯

浴衣姿の女性は入館料無料
浴衣姿の男性は入館料割引

★宵の明治村納涼バス特別運行(期間中)
名鉄バスセンター4階8番乗り場発(予約制)
15：30／16：30／17：30
明治村正門発
21：10
犬山駅からの路線バスも延長運転を行います。

●日曜講座 明治建築種あかし
7月11日・20日・25日・8月8日・22日　11：30～12：00
移築した建物にちなんだ話題をそれぞれの建物の中で解説します。
7月のテーマ：町屋建築の美しさ
会　　場：**東松家住宅、京都中井酒造**
8月のテーマ：京都に生まれたアメリカ建築
会　　場：**聖ヨハネ教会堂**

●暗夜回廊
歩兵第六聯隊兵舎2階
明治の兵舎を使って暗闇の迷路を探検するコーナーです。

●カフェ・ハワイ
ハワイ移民集会所
日・祝日および宵の明治村期間中
常夏の国ハワイの雰囲気満点のメニューで、異国情緒漂うロマンティックなひとときをお過ごしください。

●屋台横丁
無声堂前
土・日・祝日および宵の明治村期間中
明治の懐かしい味が勢揃いしました。

※催事の詳細については事前にお問い合わせください。